



Title	関係文法とスペイン語の反受動文・再帰受動文
Author(s)	出口, 厚実
Citation	Estudios Hispánicos. 1979, 5, p. 19-32
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/93580
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

関係文法とスペイン語の 反受動文・再帰受動文

出 口 厚 実

0) スペイン語(以下 Sp.)は、他動詞文の主語(Su)と自動詞文の Su が統語・形態的に同価であるのに対し、他動詞文の直接目的語(DO)はそれらに対置される、いわゆる対格型(*accusative type*)言語であることに疑問の余地はない。これは動詞呼応の相手や、人称代名詞の形態的相違から容易に証明できるだろう。一方、バスク語、コーカサス諸語、オーストラリア諸語、マヤ諸語 etc. では他動詞 DO 及び自動詞 Su が同じ特徴をもち他動詞 Su と対立関係にあり、これらは能格型(*ergative type*)言語と呼ばれる。しかし形態論的基準を重視して能格タイプとみなされている言語でも、*syntax* では対格言語と同様に、Su, DO で規定されるルールが少くないことが最近の研究で明らかにされ、一般に能格型に分類される言語も実際は対格型の統語特徴を含んだ混合的なタイプであることが指摘されるようになった(cf. Woodbury 1977)。比較的に判定しやすい *Case Marking* だけを見ても、例えば *Georgian* (*Caucasian*)は *Aorist* 時制のみで *ergative* 型に格標示され、他時制では対格型となる(Comrie 1973 : 245)。つまり、類型上“純粹”な能格言語の存在は疑わしく、すべての言語は多少とも対格型の特色をもつと言えるかも知れない。ところで、従来、対格型とされている諸言語には純粹な典型があり、能格的性質の現象が全く見られないのだろうか。対格型に分類されるのが普通である *Indo-Iranian* 系の言語(p.ej. *Hindi, Punjabi*)は、ある種の時制で能格構文を示す。また Heath (1976) は英語など若干の対格言語にも反受動(*Antipassive*)が認められることを示したし、Postal (1977) は仏語の使役構文における不定目的語補文と再帰補文の自動詞化を *Antipassive* と見なければならぬ論拠を示し、同時にこの種の現象が、従来の分類ではまぎれもなく対格的とされる他の言語(中国語、トルコ語、インドネシア語)にも見られることを示唆している。

反受動は能格言語に特有の規則で、Passive を持つ対格型とは相容れないと考えられ勝ちであるが、Sp. 統語論においてもこの非他動化プロセスが存在することを明かにすると共に、再帰文の生起を能格体系をベースにした用語で再分析する時、受動と反受動との連繫複機能をもつことうまく捉えられることを指摘するのが本稿の目的である。

1) 反受動 (Antipassive)

反受動は、対格言語にみられる受動 (Passive) の能格言語での対応物またはその鏡映 (mirror image) であると言われることがある。関係文法的な統語観に立ち、小論は受動を本質的に (1 a) のプロセス¹⁾で特徴

(1) a. Su の非 Su への格下げ

b. 非 Su の Su への昇進

づけられ、場合により (b) を伴うと規定する。格上げを受ける文法関係の種類、i. e. DO のみか、間接目的語 (IO) または斜格 (OO) を含むか、更に降格された NP の status の違いにより、言語間に様々な variation が存在するが、Sp. にも周知の通り、(1)の2条件に合致する受動の他、(a)のみを満たす passive がある。上に規定される受動のうち、降格 NP が失業者 (chômeur) となり、新主語に昇格する NP が存在する場合を「強受動」、その他のケースを「弱受動」と呼び、2種の subtype を類別する。

反受動の性格づけについても言語学者の間に必ずしも明確な一致がないが、大略次のようにみなすことができる。具体例として、Dyirbal

(2) a. 絶対格 (Abs) の非 Abs への格下げ

b. 非 Abs の Abs への昇進

(Dixon 1972) の -ɲay 構文を見てみよう。この言語では (3 a) 文と並

(3) a. bayi bargan bangul yaɾaŋu ɟurgaju.

wallaby (abs) man (erg) spear

b. bayi yara bangul bargandu ɟurganaɲu.

man (abs) wallaby (erg) spear

“ man is spearing wallaby ”

んで、能格 (Erg) の bangul yaɾaŋu が Abs へ変わり、元の Abs である bayi bargan を Erg に、動詞を -ɲay 形にした文 (b) が可能である。更に (a) 文の DO (= Abs) が与格 (Dat) に降格された文 (3 c) も成立する。Dyirbal における (3 b, c) は共に「反受動化」された文であ

(3) c. bay yara bagul bargangu ğurganapu.

man (abs) wallaby (dat) spear

る。(3)の各文間には論理的意味の相違はなく、AbsのNPのみがtopicとしての機能をもつため、談話連鎖の中で文接続の様式上、どの構文を選択するかが決定されるが、最も無標なのは(a)文だという。類似の統語関係変換がLangus²⁾、Chukchee³⁾、Dargva³⁾、Kabardian (Caucasian)⁴⁾ etc.の能格言語にも認められる。

受動と反受動の異同をPostal (1977:298)は非他動化 (Detransitivizing Rule) という観点からとらえ、両者は共に他動詞DOを他の文法関係へ変更し、文を自動詞文化するが、前者がDOをSuへ昇進させるのに対し、後者ではSuはそのままSuに留まり、DOが失業者となるとしている [(4)図参照]。しかし Antipassive において Abs がその文法関

(4) Rule Type	Nom 1	Nom 2
i) <i>Passive</i>	{ Su	DO
	{ Su chômeur	Su
ii) <i>Antipassive</i>	{ Su	DO
	{ DO	DO chômeur
	{ Su	DO chômeur

係を失うのは、どちらかと言えば波及効果であって、他の文法関係のNPがAbsを奪取する事実、i. e. 反受動の(2b)の側面をも考慮に入れる方が妥当であろう。ところがSu, DOなどのtermによる(4)のschemaではこれを正しく把握できない。殊に(4)iiの第2, 3層の不自然さが目につく。Postalは自発降格を否認する故、Suは一度DOに変わり、そのために元のDOはDO chômeurになった後、再びDOをSuに戻しているが、そのような内的証拠は見当らず、ad hocな分析と非難されても仕方がない。反受動をAbs, Ergで規定すれば極めて単純であり、(2)と受動(1)との平行は明瞭である。つまり、両プロセスでAbs $\leftrightarrow$ DOの対応が認められる。このことは対格言語における主格(他動詞Su, 自動詞Su)はある種の機能において、能格言語のAbs(他動詞DO, 自動詞Su)と同等の資格をもち、又対格はErg(他動詞Su)と等しいことを意味する。その機能とは、Van Valin (1977:696-7)の指摘するような、談話におけるNPの指示性、所与性、定性と深く係わる現用論 (Pragmatics)の機能と見るのが当って

いるのではないだろうか。彼は、この視点から、主格・絶対格 NP を文の現用的頂項 (Pragmatic Peak = Prp) と呼んでいるが、「受動」と「反受動」は Prp でない NP を Prp に格上げし、元の Prp を他の関係へ降ろす同一の機能を有している。小論はまた Passive も Antipassive も(1)(2)の a. 降格 b. 昇格の両片を必須とするのではなく、昇格がなしに Su (Abs) が自発的に退位する Spontaneous Demotion を認める点で (Cf. Comrie 1977) , (4) の定義と見解を異する。更に本稿の枠組みでは「降格」は、非文法項 (non-term) への格下げだけでなく、文法関係序列におけるランクの引下げ, v. gr. Su → DO, DO → IO, etc. をも含めて用いられる。

2) 人称 “a”

Sp. では DO が特定人間 (or 有生物) を指示する NP である時、前置詞 a を義務的にとると一般に言われている。この場合 “a” は DO に前置

(5) a. Busca a su padre.

b. Busca el libro.

されているのではなく、むしろ問題の NP は IO 化されているのではなかろうか。即ち [+ Human, + Specific] DO は昇進・上昇などを受け昇格するのでなければ、降格されて IO になり、結局 DO で現われることができないと考えられる。(5 a) 文で *su padre* は反受動化された後、IO を a でマークする規則の適用を受けて、表層で a を前置されていると解釈して矛盾しない証拠が存在する。

Sp. の 3 人称付接代名詞の格標示には方言・個人変異が複雑に絡み、文法関係の判定に対しあまり信頼できる拠り所とできないことは事実だが、(5 a, b) の DO を付接代名詞化する時、(6 a, b) のように、antipassivize された NP には IO 形の *le* が、されない DO には *lo* が使用され、両形を区別する方言があることは「反受動」を支持する一つの証拠と言える。別

(6) a. Le busca.

b. Lo busca.

の方言では (5 a, b) は共に(7)に代名詞化される。しかし、どの方言にお

(7) Lo busca.

いても free form の人間代名詞は IO 化されるのに対し、非人間 (無生) 代名詞は DO に留まる。(7) を用いる方言では Antipassive は付接形代名詞

(8) a. $\begin{Bmatrix} Lo \\ Le \end{Bmatrix}$ busca a él.

b. *Lo busca a él. (el = libro)

にまで反映されないのが相違点である。

Antipassive の要件の一つとして文の自動詞的性格があげられることがある (cf. Heath 1976:202, Postal 1977:275)。Sp.動詞はもとより自動詞・他動詞を区別する形態的手段を持たず、(5)の両文を見る限り、(5a)が自動詞文であると断定する根拠は薄弱である。多数の言語の使役構文には Clause Union と呼ばれる複文の縮約化現象が見られ、埋め込み文の Su が自動詞の Su か他動詞の Su か、i. e. Abs か Erg であるかによって、縮約後それが主動詞と結ぶ文法関係が異なることが多い。Sp. でも、方言・個人によりかなり変異があるものの、例文(9)(10)のように hacer 主文と自動詞補文 *él corre* の結合から生じた文は元の補文 Su が DO となって現

(9) Lo hice correr.

(10) Le hice buscar las herramientas. (Aissen 1977: 5-6)
われるのに対し、他動詞補文 *él busca las herramientas* から繰り上げられた目的語は一般に IO 形の *le* をとる。それでは Abs → IO の Antipassive を受けた NP を含む補文が使役主文と結合した場合はどのようなのだろうか。Bordelois (1974:100) がスペイン・メキシコ・ベネズエラ・アルゼンチンの native speaker 16人に行なった調査によれば、10人

(11)a. Lo dejó leer una carta.

b. Le dejó leer una carta.

(12)a. Lo dejó saludar a Pedro.

b. Le dejó saludar a Pedro.

は(11a)を拒否し、15人が IO の(b)文を容認し、(12)文については14人が(a)文の DO 構文の方をより好み、12人がbを受け入れなかったと報告している。この判定データはかなり明確に、反受動化された文が(9)と同じ自動詞文として扱われることを示しており、*a Pedro* を IO とみなす根拠となる。それ故、文(5a)で *su padre* は DO であるけれども特定人間であるので前置詞 *a* をとるという、伝統文法の説明や、“*a*” Insertion を極く表面に近い変形で扱い単なる表層の marker として、内実は DO であると認める一般の変形文法での処理や、また同様に *a+NP* に IO 性を認めない Aissen (1977)の関係文法的 approach⁵⁾ は重要な点を見落していると思われる。

DO 反受動化の細かな条件、つまりどのような種類の名詞句に *a* が付与

されるのかの議論はこれまでにかなりなされているのでここでは立ち入らない。しかし、何故 [+human, +specific] の DO が顕在的 marker で与格化され、p. ej. [-animate] や [-specific] の NP がこの様な扱いを受けないのか、その理由は十分明らかにされていないように見受けられる。定性・特定性・有生性などの特徴がこの非他動化プロセスの適否を決める基準となるのは偶然ではない。これらにプラス指定の NP はいずれも文の Prp になり易い性質をもち、仮に表層形態上 Su と相違がなければ DO よりも Su に解釈されてしまうので、その混同をさけ Prp としての Su と DO とのランク差を更に大きくするため IO に降格されると考えられる。一方、元来 Su とは解されにくい [-animate, -specific] の名詞句には、両義性の恐れのない動詞目的語である限り、区別的 marking が不必要なのは言うまでもない。又、付接形代名詞にまで反受動が及ばないことがあるのは clitic 形は目的語のみに存在し Su との混同がないのに一因があると思われる。paradigm で対格と主格が同一形態に帰す時、有生 DO が accusative とならないで生格に指定されるスラブ語 (v. gr. ロシア語・セルボ・クロアチア語) の格代替も同じ原理で説明される。トルコ語において Su の [+/-definite] は接辞で表示されないが、対格 NP についてはこの素性が suffix でマークされるのも、有力 Su 候補を明示して Su 解釈から遠ざけようとする類似の措置とみなされるだろう。

3) 半昇格・半降格

Comrie (1977) は多くの例証⁶⁾でもって、Demotion のみで Promotion を伴わない受動、換言すれば (1a) の関係変更のみからなる非人称受動 (impersonal passive) の存在を示し、昇格から独立した内発的降格 (退位) Spontaneous Demotion (Abdication) を認める必要性を説いた。しかし (13) の

(13) Se vive bien aquí.

ような se 文を理解するためには内発降格の概念だけでは不十分である。不定人称 se 文や再帰受動に関しては、既に拙稿 (1972, 1973, 1975, 1978, forthcoming) で主張したように、Su が元々無いためあるいは pro が削除された後、どこからともなく魔法のように se が現われ挿入されるという説は説得力が乏しい。この立場から、(13) に生起する se は初期不定 Su が DO の昇進なしに、独自に DO へ退位した結果であると考えられる。この降格は完遂されず、途中で停止したために半分は元の Su に止まっていると分析す

る。

即ち(14)から、同一の PRO が Su, DO 双方に出現する構造が生まれ、こ

(14) a. PRO(Su) V ……

b. PRO(Su) V PRO(DO) ……

れが再帰化⁷⁾を惹起して *se* が導入される。上例の半降格のように文法関係の変換が中断放棄され、元の関係と共に新しい関係をも同時に保持する「半変換」を認めるならば、ロマンス語の一部に見られる非人称構文、再帰受動だけでなく(15)(16)のようにドイツ語・チェコ語(ポーランド語、セルボ・

(15) Hier lebt *sich's* gut.

(Aquí se vive bien.)

(16) V tomto městě se žije dobře.

(En esta ciudad se vive bien) < Harkins (1953: 76)

クロアチア語 etc. 他のスラブ語にも類似構造がある) に含まれる小辞がなぜ再帰代名詞であるのかが自動的に説明される。

「半変換」は昇格の場合にも起り得る。(17)で(a)文の DO である *me* が Su に向けて半昇進して、旧 Su は *chômeur* の地位へ格下げられている。そ

(17) a. Su llegada me alegró mucho.

b. Me alegré mucho de su llegada.

の他 *asustar*, *molestar*, *preocupar*, *avergonzar*, *sorprender*, *alarmar*, *aburrir*; *apagar*, *romper*, *derretir*, *calentar*, *ensuciar*, *fundir*, *enfriar*, *descomponer* 等、多数の使役的意味の他動詞は⁸⁾(17)及び(18)に平行する両構文を許す。

(18) a. El viento apagó el fuego.

b. El fuego se apagó con el viento.

4) 半変換の Antipassive

他動文の Su が DO へ半変換し、元の DO が斜格目的語(OO)に変わる統語プロセスが若干の動詞に見られる。例えば(19a)の Su, Luis は

(19) a. Luis olvidó el nombre.

b. Luis se olvidó del nombre.

(b)文で DO にも現われ、半降格していることがわかる。又、(a)文で DO であった *el nombre* はそのあおりを受け OO へ格下げられている。一見、特殊に見える(19a)(19b)の関係は、Abs, Erg の用語で解釈し直すと

- (20) Luis :Erg ---> Abs
 el nombre :Abs → OO

歴然とする。能格 Luis は Abs へ半昇進したため、元にあった Abs の *el nombre* は失業して OO になったと分析され、これは丁度(2)で見た Antipassive の特徴に合致する。仮に、半変換の概念を利用せず *se* を一種の自動詞化標識だとしても上の事実は捉えられる。

(b.)で *Luis* は自動詞文の Su, i. e. Abs へ格上げされたことになり Erg ---> Abs, Abs → OO は反受動に他ならない。Sp.動詞には自・他動詞を組織的にマークする形態的手段はなく、“目に見える”実視 DO の有無がしばしばその基準とされる。(19b)で、*se* 自身は形態統語上 DO とみなされるものの、再帰 DO (特にその付接形のみしか出現できない場合)を含む文は実質的に他動詞文としての統語価を完全に持たず、ある種の統語ルールとの係わり方で自動詞文と扱われることが指摘されている⁹⁾。従って反受動化の結果生じる再帰文は一面自動詞的特徴をもつことが確かであり、これは一般に能格言語において、降格した Erg NP が文中に存在していても動詞は自動詞の形態的標識をとるケースと符号する。

この他、次の各例に見られるように *confundir*, *decidir*, *hallar*, *admirar*, etc. も(19)に似た antipassive 構文をとる。

- (21) a. Confundimos la carretera.
 b. Nos confundimos de carretera.
 (22) a. Extraño que estén allí.
 b. Me extraño de que estén allí.
 (23) a. Decidió ir al extranjero.
 b. Se decidió a ir al extranjero.
 (24) a. Hallé el libro que buscaba.
 b. Me hallé con el libro que buscaba.
 (25) a. Admiro tu elocuencia.
 b. Me admiro de tu elocuencia.
 (26) a. Aprovechó la ignorancia.
 b. Se aprovechó de la ignorancia.
 (27) a. Pedro confesó sus pecados.
 b. Pedro se confesó de sus pecados.

(28) a. Agarré la barandilla.

b. Me agarré a la barandilla.

若干の *se* 構文は受動・反受動の両様に解釈される。(29)のような文は(30)

(29) Se olvidó el nombre.

(30) PRO olvidó el nombre.

の構造から *passive* で関係づけることが可能である。Su PRO の不完全な格下げと DO の *el nombre* の Su への昇進が認められるからである。しかし角度を変えて見ると(30)で Erg の PRO が Abs へ半昇進される一方で、*el nombre* が Abs から追われ Erg へ退位する Antipassive の例とみなすこともできる。(31)で表わされるこの関係変更は1)で見た Dyirbal に

(31) PRO : Erg -----> Abs

el nombre : Abs ———> Erg

おける(3) a → b のパターンと一致することがわかる。違うのは Sp. で PRO は不完全な変換で半身が Abs へ昇進し、そのコピーが Erg に留まり Abs から降格した *el nombre* とその地位を分割する点である。Sp. *olvidar* は

(32) a. Olvidé el nombre.

b. Se me olvidó el nombre.

(32b)のような構文で現われ得る。この文は Su の “yo” が IO へ降格し、DO が Su へ半昇進した弱受動と見られるが、同時に Abs の *el nombre* が Erg へ半退位した一種の「反受動文」と考えてもよいであろう¹⁰⁾。前節で取り上げた(13)の文タイプもまた1)2)の定義に照せば Antipassive, Passive 両様に解釈できる。

尚、動詞 *extrañar*, *admirar* は(22)(25)の文型式の他、次の構文を許すがこれらは、それぞれ (22a)(25a) をベースにした反受動とみなされ得る。これは Abs → Erg, Erg → Abs の両過程が含まれている前述 Dyirbal の例と酷似する。

(33) Me extraña que estén aquí.

(34) Tu elocuencia me admira.

5) 再帰文における受動・中動・反受動

前掲例文のいくつかは、格体系の視角を変えれば、受動・反受動文のいずれにもみなされ得ることを見た。しかし、実際はそれらの構文がみな受動・反受動的性質を等分して持っているわけでないので、その事実を反映

する呼称が必要だと思われる。そこで、もし問題の統語プロセスが(1)の規定の2条件を満たし、(2)のa条件のみに合致する時は、それを *passive* と呼び、反対に(2)の両要件に合うが(1)のa条件だけを満足する時は *Antipassive* と解釈することにする。例えば(17)(18)(32)のペアは、*Antipassive* としては *Abs* の退位のみであるが、対格用語で見ると降格・昇格両方を備えているので各b文は *Passive* とする。他方(19)(21)(22) …etc. は受動としては降格のみが関与するが、*Antipassive* としては降格・昇格で特徴づけられるので反受動文とされる。上の基準に従っても受動・反受動どちらにも決められない場合は「中動」と解釈することにする。文(13), (29)はこれに該当する。次の(35)はその *Su* (or *Abs*) が *DO* (or *Erg*) に降格される

(35) *Se ve a los hombres.*

(36) a. *Se vende periódicos.*

b. *Se venden periódicos.*

impersonal な中動と見られる。*Su* が *IO* へ半降格されるのが(36a)であるが、この構文は弱受動に分類されるものの *antipassive* の特性は持たない。(36b)で *periódicos* は完全な *Su* の特徴を獲得しているとは言えないが (cf. 出口 forthcoming), 初期 *Su* は削除され、*DO* が *Su* へ半変換された強受動文の一種であろう。(37)–(39)のように *PRO Su* を含ま

(37) a. *Fueron a Barcelona.*

b. *Se fueron a Barcelona.*

(38) a. *Sale el agua del grifo.*

b. *Se sale el agua del grifo.*

(39) a. *Comí el plato.*

b. *Me comí todo el plato.*

ない若干の自動詞・他動詞構文にも再帰形式を伴う *variant* が認められる。再帰文の分類において、これらはしばしば特殊事例として例外視されたり、*Lexicon* で扱われるべき問題として文法記述から除外する態度が見受けられる。しかし小論はこのタイプも前出再帰文と同様に *Su* 半降格¹¹⁾の例とみなされるべきと考える。再帰代名詞を欠く(37a)(38a)(39a)も文法的であるが意味に場合により異なる差異が見られる。(b)文の再帰構文の方は、意味役割における *Su* の働きを押え非焦点化するために、*Su* 以外の動詞共演意味成分に *focus* が移り、運動そのものよりも起点からの離脱を浮き掘

りにさせたり(37b), また(39b)のように DO と動詞行為の一体性, 言い換えれば動作の完結全体性を強調したり, Su を非活性化する(38b)。(37)(38)両文では Su (Abs) の降格は DO (Erg) に向けてである故, 中動とみなされるが, 他動詞構文(39)において Su → IO の格下げが認められるものの, Antipassive に該当する統語関係の変更はない。従ってこの文型式は弱受動と見る。

Sp. の再帰構文に係わる Passive と Antipassive の共通項を Su, DO etc. の対格用語で一般化するならば, それは Su の降格である。Su が PRO の場合, demotion は義務的でありそれは半変換, 完全変換, 削除の3つのケースがあり得る。PRO の削除に関しては関係変換の一種としての Su からの撤去消滅 [v. gr. (36b)] と呼応規則後に行なわれる一般の非強意代名詞削除 [(13)はこの適用を受ける] とを混同すべきでない。Su が降格 or 半降格される先は, 文法関係のハイアラキーで1ランク下の DO であることが最も多く, もし旧 DO があって関係が変換されず維持していれば, DO より一段階下の IO になる。

次表(40)は Sp. 再帰構文における文法関係変換の一覧である。↗は promotion を, ↘は demotion を, 破線は半変換をそれぞれ表わす。

(40)

タイプ	Acc.	Erg.	例 文
I 反受動	{ Su ↗ DO DO ↘ OO }	{ Abs ↗ OO Erg ↗ Abs }	(19b), (21b) – (28b)
II 中 動	{ Su ↗ DO DO ↗ Su }	{ Abs ↗ Erg Erg ↗ Abs }	(29)
III 中 動	Su ↗ DO	Abs ↗ Erg	(13)(35)(37b)(38b)
IV 弱受動	Su ↗ IO	Erg ↗ Dat	(36a)(39b)
V 弱受動	{ Su ↗ IO DO ↗ Su }	{ Abs ↗ Erg Erg ↗ Dat }	(32b)
VI 強受動	{ Su ↗ OO DO ↗ Su }	{ Abs ↗ Erg Erg ↗ OO }	(17b)(18b)
VII 強受動	{ Su ↗ ∅ DO ↗ Su }	{ Abs ↗ Erg Erg ↗ ∅ }	(36b)

再帰形を惹起させる直接的要因は, 一般に主張されるように, 必ずしも PRO

Su の存在でないことが上の図式から明らかである。I, VI, Vのタイプは PRO を含まないし、又型式 III, IVにも PRO と無縁の Subtype (37b, 38b, 39b) が存在しているからである。7 types のいずれにおいても Su の NP を Su 関係から変換させ、下位の rank への格下げが起こっている。文中の他の NP の様々な関係変更の異同によって、多彩な再帰文の変種が生まれると言えよう。即ち、PRO は Su を降格させる一つの要因ではあるが、再帰文を生起させるものは PRO のみでないことを発見する。

さて、能格用語で再帰動詞諸構文を分析すると、タイプ IVを除いて、すべての類型に Antipassive の特色である Abs の降格が見られる。結局、ほとんどの型式も視点を変えれば、広い意味での受動・反受動の例とされ得るという事実気づく。このことは、Sp. がやや受動に多用する傾向を持つものの、再帰形式は passive と antipassive の相互乗入れルールとして両プロセスを連係しており、いずれにも機能できる柔軟性に富んだ統語手段として活用されていることを示しているのではないだろうか。

註]

1. 本稿で用いるプロセス、格上(下)げ etc. 文法関係の変更は派生理論を前提しない。即ち構造の別構造への mapping (=変形) を必ずしも意味せず、文の適格性条件と解することができる。
2. Dik 1978:168
3. Comrie 1973:243-5
4. Van Valin 1977:698
5. [“a”]...does not identify the nominal as 3 (=indirect object). 2s (=direct objects) which designate specific, higher animals are preceded by a ; (p. 7)
6. 次の Sp. の se もその中に含まれている(p. 49):
En Europa se nos conoce.
No se habla de música.
¿ Por dónde se sale ?
7. Sp. の再帰化規則は 2 NP の referential identity を要求せず, non-distinctness で十分である。ここでは、意味構造の再帰性に起源をもつ自己再帰文、相互文について触れない。これらと再帰受動(反受動)文との関連については出口(1978)を参照されたい。
8. Klemme (1976:79) の分類による set 1 verbs はこのクラスに入る。
9. 再帰目的語は受動化や目的語繰り上げの対象とならず、また使役文における節結合に際しても再帰文は自動詞を含んでいるかのように振舞うことが知られている。Cf. (Bordelois 1974:31-2):

- i) a. El se vistió.
 - b. Su padre lo hizo vestirse.
 - ii) a. Ellos se volvieron generosos.
 - b. La adversidad los hizo volverse generosos.
10. “置き忘れる, 持ってくるのを忘れる” 意で Luis se olvidó el dinero のように Erg が与格へ半降格し, Abs はそのまま留まる構文も発見されるが, これは Antipassive とみなされない。cf. (39b)
11. この場合も内発的降格である。Perlmutter (1978) で提案されている dummy DO 仮定説は Motivated Chomage Law (Perlmutter & Postal 1977: 410) を救済せんがための苦肉の策との印象を免れない。(37/38) のように当初 unergative clause である場合はもとより, (39) に見られる他動詞文に対しては一層困難な状況がある。Lexical NP の DO と dummy DO の共存が Stratal Uniqueness Law (Perlmutter & Postal 1977: 408) で禁じられている故, 仮に IO dummy を設定すると, DO である todo el plato を一度 Su へ昇進させそれにより yo を半降格させることはできるが, dummy の昇進でもって Su を DO を戻そうとしても, Perlmutter の passive の定義によれば IO の Su への昇進は不可能であるという矛盾に陥いる。

(1978年9月5日)

* 本稿は第14回日本ロマンス語学会 (早稲田大学: 1978.5.13) における筆者の研究発表「スペイン語における主語・半主語・無主語 — se 反受動文の問題点」の論旨の一部を修正・発展させたものである。

References

- Aissen, Judith (1977): The interaction of Clause Reduction and Clause Union in Spanish. -NELS 7, 1-17
- Bordelois, Ivonne A. (1974): The grammar of Spanish causative complements. Ph.D. Dissertation. M.I.T.
- Comrie, Bernard (1973): The ergative: variations on a theme. -Lingua 32, 239-253
- (1977): In defense of spontaneous demotion: the impersonal passive. -Syntax and Semantics 8, 47-58
- 出口厚実 (1972): Se 受動文と再帰動詞のシンタクシス — HISPANICA 16, 1-16
- (1973): 格文法とスペイン語再帰文の動作主格 — Estudios Hispánicos 3, 57-73
- (1975): seはどこから来るか — スペイン語再帰動詞構文について — HISPÁNICA 19, 70-84
- (1978): スペイン語 se 統一仮説に向けて, 一大阪外大学報 42, 1-14
- (to appear a): 「主語性」の概念とスペイン語の不完全主語文.
- (to appear b): Antipassive and reflexive passive in Spanish.
- Dik, Simon C. (1978): Functional grammar. Amsterdam.

- Dixon, R.W.W. (1972): The Dyirbal language of North Queensland. Cambridge.
- Harkins, William E. (1953): A modern Czech grammar. New York and London.
- Heath, Jeffrey (1976): Antipassivization: A functional typology. -BLS 2, 202-211
- Klemme, William H. (1976): A thematic relation analysis of the syntactic and semantic domain of selected Spanish verbs. Ph.D. dissertation. The Pennsylvania State University.
- Perlmutter, David M. (1978): Impersonal passives and the unaccusative hypothesis. -BLS 4, 157-189
- Perlmutter, David M. and Paul M. Postal (1977): Toward a universal characterization of passivization. -BLS 3, 344-417
- Postal, Paul M. (1977): Antipassive in French. -NELS 7, 273-313
- Van Valin, Robert D. Jr. (1977): Ergativity and the universality of subjects. -CLS 13, 689-705
- Woodbury, Anthony C. (1977): Greenlandic Eskimo, ergativity and relational grammar. -Syntax and Semantics 8, 307-336